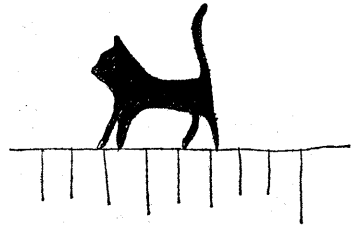


## 穴の向うの世界 (II)

立川 多恵子



「こんにちは」子どもたちはあそびの手を休めてこっちを見る。

白い紙に鉛筆でこまかい絵を描いている子、粘土を指でちぎっている子、先生とカルタを取っている子、積木で大きな家を作っている子いろいろである。

二十一畳と六坪の板の間の中央にたった一つ大きな石油ストーブが赤く燃えている。

はじめて園を訪問したときは秋ということもあって、子どもたちは一日中戸外活動に余念がなかったが、今回は厳寒のためさすがに戸外で遊んでいる子どもの数は少

い。

屋内あそびの中で、私が特に面白いと思ったものに「押入れのあそび」がある。先生のお話では、季節を問わず行われているあそびだという。

子どもは何故押入れのあそびを好むのだろうか、私はそのれを子どもから学ぶことができたらいと思った。

三才児のM子とN子、そして二才児のA子が共に大きな紙袋を持って連れ立って押入れに入る、お家ごっこが始まりだ。

M子は「さあ、夜ですよ、寝ましよう」といって板戸

をしめる。(この押入れは、家庭の押入れとちがって板戸で作られていて、中側にはプリント模様のカートンがかかっている)

どうやらM子はお母さんのつもりである。子どもたちはしばらく中でもみ合っていたが急に静かになる。

「朝ですよ」というM子の声がある。M子は大きな紙袋をもって「お使いに行ってきます。」といって押入れから出てきた。N子もA子もついて行きたがる。M子は引き返して、お姉さん役のN子だけを連れ出した。押入れの中には赤ちゃん役の二才児のA子が一人残される。二人は部屋の中を一まわりして押入れに戻ってくる。「さあ、夜ですよ、早くねましよう。」といって板戸をしめる。夜と朝がくりかえしやってくる。

朝になってM子とN子がお使いに出ようとすると、またA子が「私も……」といてついでにきた。「赤ちゃんはご病気でしよう」と板戸をしめる。押入れの中から泣き声が聞える。こわいお母さんである。M子は、支配的なお母さん役をみごとに演じている。

先生がやってきて「電気をつけようね」とそばにあった懐中電燈を照らす。

A子は泣きやむ。お使いから戻ってきたM子は、興味深そうに先生の手から懐中電燈を受け取る。押入れの中に入ってまた板戸をしめる。中から子どもたちの話し声がする。

「あーんしてごらん、赤ちゃんはやっぱり風邪ですね」M子の声である、どうやらお医者さんごっこが始まったようだ。

夜が来て、朝が来る。明暗、視覚的なコントラストのくりかえしが三才児にとって楽しい。しかしそればかりではない。M子たちは自発的に闇の世界に経験をひろげる。子どもたちは闇の中で内的経験を深める。

懐中電燈の出現は、あそびに新しい発展をもたらした。しかしもしここで懐中電燈が出されなかったらどんなあそびがつよいただろうか、私はそれが知りたいと思つた。

押入れは、午後になると、男の子のグループに占拠された。T夫は机の上の懐中電燈を見つけると、それをもって押入れに入る。N夫・S夫・B夫とつゞく。しめられた板戸の中では懐中電燈を照らしてヒソヒソ密談が始

まる。どんな話をしているのか耳をそば立てたが、残念ながら話の内容はわからない。明りが消える。押入れの中はシーンと静まり返る。コトリともしない。

暗闇のまま時間が経過した。しばらくして「やった」というT夫の声がして板戸が開かれる。一番先に出てきたのはN夫である。T夫とB夫も肩を組んで出てくる。

先生は、私にB夫が最近になって押入れであそぶようになったと話してくれた。

押入れは、何時でも入れるものと思っていたので、大発見である。

子どもが押入れあそびをするようになるには、それなりの条件が揃わなければならない。

緊張感の強い時期はむずかしい。

三月号でも触れたが、B夫はセメント会社につとめる父親の転勤で、二ヶ月前にA市の保育園から転園してきた子どもである。

私が始めて会ったのは、入園して三日目のことだった。その日は朝から砂場で遊んでいた。「サッカーしよう」というT夫の誘いにもならず、手近にある器に、次から次と砂をつめて遊んだ。この活動はその後何日

かつづいた。B夫は三日四日の間に、空缶、紙コップ、破れボールなど、器として使えるもののすべてに砂をつめ尽くす。彼にとってこの活動は、転園による抑圧を解消するための大切な役割をとってくれたにちがいない。

子どもが納得するまでやりとげることができるのは、保育のゆとりである。B夫はこの後、友だちがやり始めた遊びに参加していった。B夫は絵を描くこと、追いかけてっこをするなど、あそびを通して転園時の緊張をのり越えた。緊張がほぐれた時、B夫はまず自分一人で押入れの探險を試みる。

次の日も彼は、T夫の外に出ている間に、おとなしいU夫と一緒に押入れに入りこんだ。

今回B夫がはじめてT夫とグループを組んで、押入れあそびに参加したことは、彼にとって大きな冒険に等しい。不安と恐怖の暗闇の中で依存し合うことで心を開く、B夫が気持を開いてT夫と一緒に押入れのあそびをするることによって、T夫と出会えるチャンスが生れたのではないだろうか。

その結果、T夫とB夫は肩を組んで押入れから出てきた。一時的かもしれないが、T夫とB夫はこの機会にた

しかにつながりを持つことができた。

押入れは夜の世界である。昼の世界に生きる子どもたちが押入れあそびを通して、不可解な夜の世界を体験する。自分一人で通りぬけることのできないような闇の世界、押入れの遊びは子どもにとってそんな世界が濃縮されているように思う。

不安と恐怖の未知の世界で体を寄せ合い、手を取り合って芽ばえた連帯感がT夫とB夫の距離を縮めていく。

午前中のM子たちの押入れあそびに登場した懐中電燈は、午後もT夫によって机の上から持ち出される。私は子どもたちが懐中電燈の存在を知らなかった頃の押入れあそびがどんなだったか知りたと思った。

何故なら子どもたちは懐中電燈という小道具を利用することによって、闇の世界を自分たちで支配することができた。このことは子どもの知的発達を意味することになるのだが、別の角度から見ると、闇の世界における子どもの情緒的経験を浅薄なものにしてしまったのではないだろうか。私には小さな懐中電燈が現代文明の象徴のように思える。

○園では二時半になるとおやつを出す。今日のおやつはお汁粉である。助手の先生が前日から小豆を煮て用意してくれていた。

子どもたちはそれぞれ自分のコップを持って集まる。一人ひとりお餅の入ったお汁粉が配られる。どの子も夢中になって食べる。気の早い子どもは食べながら「お代りしていゝの」と聞きに来る。

B夫のうれしそうな顔がこっちを見ている。おいしくてたまらないという表情だ。一人がお代りすると、次々に立ち上ってお代りする。大きな鍋がすっかり空になった。子どもはお鍋をのぞきこんでみて、あきらめ顔をして、一人ひとりコップを洗いに行く。

先生を交えても二十数人の集団は、一つの鍋から同じお汁粉を食べる、小集団ならではの経験といえよう。

(十文字学園女子短大)